別紙 2

審査の結果の要旨

論文提出者氏名：髙山花子

20 世紀フランスの文学者モーリス・ブランショにおいて、フランス語「レシ（récit）」は単に「物語」というのみならず、「歌」や「叙事詩」、さらにまたそこで物語られる「出来事」自体をも包含する豊かな意味を有していた。髙山花子氏の博士論文「モーリス・ブランショの「レシ」の思想」はこうした認識を基点とし、とくに 1950 年代以降のブランショのテクスト群のうちで、「非連続の連続」を核心とする言語実践のありようが、「レシ」の語とともにひとつの思想として浮かび上がる過程をたどったものである。

先行研究を整理しながら以上の問題関心を提示する序論部に続き、第 1 章は 40 年代ブランショの文学批評に見られる「レシ」についての記述を取り上げ、ジュネットやデリダに着想した「モード」の概念に拠りつつ、それがジャンル上の一区分に収まるものでないことを示し、やがて本格的に展開される思索への萌芽的な関心の所在を明らかにする。

第 2 章は、カフカ『城』を題材としたフィクション論「虚構の言語」（『火の分け前』（1949 年）所収）を分析し、そこでいわれる「レシ」が、対象との十全な一致を欠くことで特徴づけられるヘーゲルの象徴概念とも呼応しながら、本質的な貧しさのゆえに現実を弁証法的に止揚する可能性を有するものとされていることを確認する。

序奏的な性格をもつ上記ふたつの章を経て、第 3 章では、文学の経験を『オデュッセイア』の名高い逸話「セイレーンの歌」と重ね合わせて論じたテクスト「想像的なものとの出会い」（『来たるべき書物』（1959 年）所収）が仔細に検討される。髙山氏はそこでオデュッセウスの生き延びの経験そのものが「レシ」と呼ばれることに着目し、ホメロスはむろん、プラトンの『ゴルギアス』、『国家』、アリストテレスの『詩学』との比較対照をつうじて、「レシ」が事実として確証されることのついにありえぬものでありつつ、「想像的な同時性」によって「語り」とともに生起する「出来事」それ自体として捉えられていることを明らかにする。

第 4 章は、前章の内容をブランショによるマラルメ読解へと接続し、セイレーンの歌に「欠陥」を見るブランショと「諸言語の欠陥」を論じるマラルメとのあいだに言葉と物の根源的な不一致、言語の本質的な貧しさといった主題が共通していること（これはヘーゲルへの参照のもとでなされた第 2 章の議論ともつうじる）、さらにブランショのいう「レシ」がそうした「欠陥」への「贖い」とみなされうることを指摘する。同時に、ブランショ自身、マラルメ晩年の詩作品『賽のひとふり』については、それが「語り」を排した直接的な呈示を志向する点で「レシ」とは決定的に異質なものと考えていたことが冷静に確認される。

第 5 章では、ブランショの「レシ」を理解するうえでもっとも重要と髙山氏が考える「非連続の連続」という性質に光が当てられる。アランを引きつつガートルード・スタインを論じたテク

スト「バラはバラ……」（1963 年）の読解によって、「非連続の連続」を特徴とした非論証的な言語実践こそが真の思考につうじるとされていることを確認する一方、ギリシア研究者クレマンス・ラムヌーに捧げられた「侵犯についてのノート」（1971 年頃）で、ギリシア神話にしばしば見られる、決して滑らかとはいえない「侵犯的な」生殖についての叙述が「レシ」と呼ばれていることに着目し、「レシ」の問題が歌や叙事詩、また神話における系譜の問題に接続されうることを示して次章以降の展開を準備する。

第 6 章が論じるのはかくして「歌」である。髙山氏は、ブランショにおける論証的言語と音楽的言語の対比を強調したうえで、40 年代から 80 年代までの複数のテクストに子供の数え歌への言及が現れることを指摘し、言葉と沈黙の共存（それはまた生と死、人間と動物の共存でもある）を示す数え歌が、前章で焦点化された「非連続の連続」という言語様態の具体的かつ理想的な実現となっていることを明らかにする。

最終第 7 章は批評的なテクストを離れ、『謎のトマ』初版（1941 年）を取り上げる。髙山氏はこの作品を「レシ」とみなし、やはり「非連続の連続」という観点からとくに生殖（とその不在）という主題に着目する。前章を引き継いでなされる鳥の歌の描写の仔細な読解をつうじて、作品世界において生殖行為の自明性がゆらいでいることが指摘されるとともに、『トリスタン物語』を下敷きとした不義と近親姦のモチーフの意義が、ここまでで論じられた言語表現の連続性／非連続性の問題との重なり合いにおいて分析される。

結論部では、本論部分の要約に続けて、ブランショにおける「非 - レシ」の思想というべきものを論じた一節が配される。そこではまず『事後』（1983 年）における「アウシュヴィッツのレシ - 虚構はありえない」という命題の検討がなされたのち、『災厄のエクリチュール』（1980 年）の分析を経由しながら、晩年のテクスト『わたしの死の瞬間』（1994 年）が、デリダに即しつつ、みずからの成立要件そのものを宙釣りにする限界的な「レシ」として読み解かれる。そのうえでさらに、ブランショにおける「レシ」の問題系が 41 年の短いラヴェル論ですでに予告されていたとする簡潔な記述とともに論文は閉じられる。

本論文は、ブランショがひときわ豊かな著述活動を展開した時期のテクスト群を主たる検討対象とし、「レシ」という語をプリズムとすることでこの文学者の難解な思想の多面性を明らかにしたものとして、当該分野に貴重な貢献をもたらす重要な成果であるとの一致した評価を審査員から得た。問題点としては、ひとつの単語にこだわったことでしばしば解釈上の偏りが生じていること、同時に、取り上げられたテクストに「レシ」の問題との関係が判然としないものが少なくないこと、先行研究や文学史的・思想史的な文脈についての記述が十分とはいえないことなどが指摘された。とはいえ、これらの瑕疵は本論文の学術的な意義を本質として損なうものではなく、髙山氏の今後の研究によって発展的に解決されるものであろうことも確認された。

以上により、本審査委員会は全委員一致で、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。